

保守のリハビリテーション（続き）

一年間滞在していたアメリカでは、昨年アメリカの日本史研究者たちによって出された「日本の歴史家を支持する声明」の取りまとめをしたジョルダン・サンドさん（ジョージタウン大学）と親しくさせてもらう機会があった。私は、この声明が発表されてすぐ、これが良くできていると彼に告げ、けっして自分の仲間だけに宛てている文章ではないことに感銘を受けたことを伝えた。「日本では、右翼も左翼も、自分の仲間にしかな言葉を発していないんですよ」という私の言葉に対し、即答ではなくかといって間を置いて応えるというわけではなく、ちょうどその中間という間の取り方で、「それはここ（アメリカ）でも同じですよ」と応えてくれたのが印象的だった。

日本における歴史研究が真摯に、何かの政治的圧力に屈したり俗情と結託したりすることなく続けられることを期待するというこの声明、じつはたんに日本の歴史学者に宛てたわけではなく、むしろ彼らが批判する相手（いわゆる歴史修正主義的な歴史観を持つ政治家）に対し、安易な歴史観に陥ることなく誇りと良心をもって自ら律することを期待するというもう一つのメッセージを持っていた。言ってみれば、保守の矜持に期待し、それによって彼らをして自身を拘束せしめているのである。

ところで、少数派の声に耳を傾けることが軽視される世の中では決してないとはいえ、やはり民主主義で大事なものは「半分」を獲ることだろう。それは逆に言えば、半分近くの人を諦めることを受け入れる覚悟が必要だということの意味する。あるいはその半分近くの人に批判されることに対する鈍感さも求められるだろう。ただ、それにもまして重要なのは、「半分以上」を味方にするために、少々立場が違っていても受け入れる度量であり、ときには全く異なった思惑をもって入り込んでいる人も「仲間」として扱わなければならないということである。

自分が「半数」よりかなり少数である場合、「半数」を目指すためには、半分以下の「仲間」を厳しく査問してより純粋な仲間を選び抜くことが言語道断だけでなく、むしろ「今は仲間でない人」を説得しなければならない。とすれば、自分の仲間にあててだけアピールしている言葉は、目的と手段を取り違えていることになる。だからあの「声明」に関して言えば（過半数を目指すとか、そういった目的のものではないけれども）、自らと立場の違う人——この場合は「保守」とされる人々——に対し、（ある意味その弱みともいえる）プライドの高さを利用して、説得を試みようとしている。なかなかの作戦ではないか。

忘れてはならないのは、敗戦以降、この国の「保守」は負け続けているということだ。そこには、明治時代を理想とすることの無理がある。『坂の上の雲』は面白い歴史小説だけれども、例えば基本的に女性無視で、現代に合わせてNHKドラマになるさいには女性キャラクターの登場シーンを大幅に増やしているほどだ。現代社会に明治の理想をそのまま持ち込めば大混乱必至である。大部分の人には選挙権が無い時代の話である。

敗戦による押しつけであろうがなかろうが、さまざまな「革新」的な価値観の変化がこの社会には施されていて、それらはすでに社会の基盤として根付いている。

もちろん「革新」の人々も、戦後社会は妥協や敗北の連続だったというだろう。けれども、それはお互いさまのはずだ。公平に見れば、むしろ全体として私たちの社会は「革新」寄り、あるいは端的に言って「進歩」しているのである。「革命」は一度も実現していないけれども、「革新」は戦後、常に進められてきた。

それでも「革新」の人々によって「戦後民主主義の危機」は幾度となく叫ばれてきたが、「戦後民主主義」は崩壊せず、どちらかというとな常に負け続けているのは「保守」のほうである。保守の存在価値など、多数派の庶民の意識が「革新」的变化のスピードについて行けないときに、行き過ぎた（と感じられた）変化を多少押しとどめる機能くらいになってしまう。保守が「数」を持っているとすれば、むしろ「進歩」の推進力がそれだけ強い証拠だと考えて良い。あるいは保守党とされる自民党こそが、戦後社会において「改造」の担い手でさえあった。

ただ現在、「保守」とされる人々が狙っているのは「半分」ではなく、「三分の二」の支持である。つまり、「半分」がそれまでの目標であったとすれば、このうえさらに六分の一の支持を取り付けなければならない。それは簡単なことではない。それまでの「安定した半数」を「三分の二」に組み替えるのは、相当な調整が必要だろう。そこには「目標に比すれば自分たちはまだまだ少数派」だという貪欲さがある。自分を支持してくれていた「半数」だけに通じる言葉ではなく、両者の中間で漂っている人、あるいは「反対側」に入っている人を説得する必要がある。それをいかにして可能にしようとしているのか。

これは詳細な調査が必要だと思われるのだけれども、昨年アメリカ歴史家たちの「声明」は、そのやり方を示している（しまった）ように思われる。ある意味、「保守を自律させる」という試みは成功を取めたのではないか。首相はネトウヨ的な言葉を吐かなくなったし、「謝罪」はしなくても、「遺憾」や「痛惜の思い」は必要に応じて出せるようになっていく。

そして今年のおバマ大統領の広島訪問。「謝罪」は決してせずとも、その「遺憾」の表現は理解可能なものだったし、「謝罪を求めない」という日本側の意志も伝わった。罵声や怒号、あるいは涙にまみれた表現が必要なのではなく、（しかし「こらえきれぬ涙は静かに溢れる」という演出は不可欠なあたりで）投下そして被爆七十年をこえ、双方の立場を^{いたわ}労るという厳かな儀式が執り行われた。

「謝罪」ではなかったとはいえ、訪問と献花を行うことで、アメリカでオバマ大統領が何を失ったかはよく知らない。現代の日米同盟の重要性和「謝罪ではない」という落としどころによって、引き出せたのは、「日米の<成熟した>関係」である。

こうした経験が、「保守」を変えてゆく。もともと「保守」政治家が行う「遺憾」は、「仲間」内の調整が実現できれば、その落差（譲歩の幅）ゆえに、実は大きな政治的な資源であった。（もちろん、乱発されると価値が下がるはずだが） 「六分の一」を上乗せするカ

ードを、既に持っているといえる。例えば、今後の保守政権で仮に日中外交を重視する場合、首相が南京を訪問し、「謝罪抜きの献花」を行う可能性くらいはありうるだろう。

その時、「南京事件まぼろし」派は烈火の如く怒り狂い、2ちゃんねるあたりは「裏切られた」といって大荒れだろうが、(政権獲得の初期には重用していた)「味方」の過激派を切り捨て、分厚い中間層・浮遊層を取り込むというのは、政治の世界にはよくあることなのだ。

依然として振れ幅はあるし、定義や前提が共有されていないという問題もあるが、歴史の実証研究の進展は「まぼろし派」を見戯に属するものとしているし、「謝罪はしない」というメッセージを十分に事前に含ませておけば、今回のオバマにとっての退役軍人会への対処くらいですむものとなる。もちろん退役軍人会のパワーは、かつて国のために命を懸けて戦ったということに根ざしているために、「まぼろし派」よりも遙かに強い。

「革新」からすれば、こうしたことが実現してもなお、まだまだ不満に思われる部分もあるだろうが、その場合は例の自律を促す褒め殺しをしてゆくしかない。歴史に関する保守の「リハビリ」ができている、とは、そういうことを指す。(もちろんこれすべて、中国社会に「謝罪なしの献花」を受け入れて貰えなければそもそも実現不可能な話ではあるけれども)

いずれにせよ、(あくまでも政治技術として) 少しずつ「まとも」になってゆく「保守」政治家の歴史認識と、私たちの「歴史を体感する」ありかたがどのような意味を持っているのかは、また別の機会も設けて考え続けてゆこう。同時に、「革新のリハビリテーション」も検討しておきたいところである。